

第二百七十話 蒋介石の強かさにしてやられた日本！

「以德報怨」(老子)により日本に対応したとされる(背景その他は今ここでは論じない)国民党主席蒋介石だが、日本は彼の強かさに翻弄され、掌に載せられ、してやられた感がする。勿論、日本側の不手際も多々あり、ある意味ではオウンゴールだった面もある。日本が、云わば、為す術なく蒋介石に手玉に取られ、「してやられた」と言っても過言ではない。その状況を管見する。



- 1 第二次上海事変(独顧問により錬成された精鋭部隊をもって上海の日本軍を攻撃し、世界の目を上海・中国に向けさせる。国際化戦略というとか。)
 - 2 トラウトマン工作(駐華独大使の仲介による日華和平交渉)
南京攻略により追い詰められた蒋介石は、独の仲介は拒否すべきでないとし、和平機運が高まった。が、南京攻略した日本側による和平条件の吊り上げにより本工作は中止となった。(93話参照)
 - 3 国民政府を相手にせず声明(第一次近衛声明) (93話参照)
1938/1/16、近衛首相はトラウトマン工作に基づいた和平案提示に対して、蒋介石政府が応じないことを原因として、交渉打ち切りの声明を発表した。日本の傲慢さ？
 - 4 対米・英工作
 - ・スティムソン委員会(日本の侵略に加担しないアメリカ委員会)を通じての大規模宣伝戦
 - ・宋美齡による反日世論の喚起(第11話参照)
 - ・惜しまぬ対米宣伝費(蒋介石厳命 毎月10万ドルの対米宣伝費を惜しむな)
 - 5 日独伊三国同盟にほくそ笑む蒋介石
中国は強大な戦友(敵の敵は味方)を獲得したとの打電、対日作戦の中止が米英にとって不利益であると説得し、対日講和すらもをちらつかせて(脅迫紛い?)の対米・英説得する。老獪なるかな。
 - 6 日本の重慶蒋介石政権との直接和平交渉
近衛内閣が模索していた蒋介石との直接和平交渉に対し、蒋介石側の誠意を高いと信じた首相は、大幅譲歩の腹を固めていたようだ。が、日本による汪兆銘政権承認(1940/11/30)で頓挫、蒋介石を頑なにしただけに終わった。
 - 7 連合国の一員として首脳会談参加
カイロ会談(1943/11/22~)に参加し、国際的地位の向上
米国は中国の対日戦からの脱落を危惧したので、蒋介石の参加を認めた。
 - 8 暫定協定案への猛反対により英説得し米をも納得させた。(50話参照)
米国の暫定協定案(最終案1943/11/25付、日本側提案の乙案に相当する。対日経済制裁の一部緩和、支那からの撤退文言なし)を知るや猛烈に反対し、破棄させた。
蒋介石は、暫定協定案を知った時の激しい心情を日記に吐露し、そして、在米の胡適大使に「米を日本と妥協させてはならない。それは中国の死を意味する」と厳命した。
 - 9 米国の対華援助(物的戦力増強)
 - ・レンド・リース法による中国支援：8.7億ドル(全体の1.8%と微々たるものではあるが・・・)(欧州、ソ連最優先が米国の基本的態度)
 - ・米の対華武器援助：戦闘機100機(対英供給の関係もあり要望の一部のみ)
 フライング・タイガース(第10話 義勇兵という参戦)
 - ・中国からの銀の購入(中国は、銀代金を軍需物資購入に充当した。)
 - ・ドル借款協定締結：1.2億ドル
- *認めたくはないが、蒋介石が一枚も二枚も上手だったのだろう。